



みんな笑顔で集合写真



決勝戦(東)「町屋芭蕉」チーム



決勝戦(西)「三色団子とお花見」チーム



優勝カップ

*写真撮影：林英一氏(荒川区文化財保護推進員)

荒川ふるさと文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL03(3807)9234
登録(06)0053号-02

荒川区俳句のまち宣言から10周年 俳句と地域の文化財

奥の細道矢立初めの地 平成27年3月、荒川区では奥の細道千住あらかわサミットを開催しました。あわせて「荒川区俳句のまち宣言」を制定しました。今年は10周年の記念の年にあたります。

去る令和7年3月22日、「奥の細道矢立初めの地」子ども俳句相撲大会を開催しました。南千住が奥の細道矢立初めの地であることを内外に広め、子供たちに俳句のすばらしさを伝えて、豊かな感性と表現力を育むことを目的として、平成20年以来開催しています。今回で16回目を迎え、全153チームから応募がありました。千秋楽は予選を通過した8チームがトーナメント形式で自作の俳句を披露し、熱戦の結果、尾久第六小学校5年生の「三色だんごとお花見」チーム(細貝優斗さんと渡辺康介さん)の優勝で幕を閉じました。

地域の文化財と俳句事業 区内には俳句関連の指定・登録文化財があります。西日暮里養福寺の談林派歴代の句碑、妍斎落菌塚の碑、梅花仏鑑塔、そして、素盞雄神社の「松尾芭蕉の碑」です。「松尾芭蕉の碑」には上部に「行春や鳥啼魚の目は泪」を含む、「おくのほそ道」の旅立ちの一節が、中央には芭蕉の座像が刻まれています。奥の細道矢立初めの地子ども俳句相撲大会は、大会だけで終わるのではなく、参加チームは、木札に自分の俳句を書いて、この芭蕉さんへ報告します。文化財を通じて俳句の歴史に触れることで俳句文化を育んでいます。

当館の俳句関連コンテンツ 館内には、令和元年、奥の細道330年を記念して設置された「奥の細道と千住」コーナーがあり、奥の細道関連資料を展示しています。また併設する南千住図書館に奥の細道コーナーがあり、関連図書を手にとって読むことができます。

当館入口では、俳句のまち宣言が制定されたことを受けて設置された、金子兜太氏の「荒川千住芭蕉主従に花の春」の句碑や、千住大橋を渡る松尾芭蕉と弟子の曾良の3Dアートが迎えます。さらに当館エントランスでは、大会での俳句や当日の様子をパネル展示しています(6月1日まで)。ぜひお越しください。

速報!**土の中の荒川区⑪****町屋四丁目実揚遺跡****区内で初めて「胞衣皿」が出土**

町屋四丁目実揚遺跡(以下、「実揚遺跡」)P地点の発掘調査現場から、荒川区の遺跡の中で初めて胞衣皿が検出された。実揚遺跡は、古墳時代を中心とした遺跡として知られ、それ以後の時代の遺構、遺物も確認されている。実揚遺跡の遺跡名は小字「実揚」から名付けたもので、町屋村の中心的な場所であった。現在でも江戸時代に遡る旧家が集中する住宅街である。

「胞衣皿」とは？ 胞衣皿(写真1)は二枚重ねで出土した。そもそも胞衣皿とは何なのだろうか？

胞衣皿とは、胞衣を納める皿のことである。胞衣とは聞き慣れない言葉だが、出産に伴って母体から排出される胎盤等の呼称である。この胞衣を埋納するための容器の一つが胞衣皿である。出産の儀礼と胞衣皿 胞衣は古来より子供の分身とか、霊力を持つ存在として扱われ、丁重



写真1 胞衣皿の出土状況

に土中に埋める「胞衣納め」という儀礼が行われてきた。埋める場所は、時代、社会、地域によって差はあるが、古いにより吉方に埋める、床下、

便所の前、家の入口の内または外、大黒柱の下、竈の後ろなどに埋めるとされる(『国史大辞典』2)。病院出産が当り前の現代ではほとんど見られないが、自宅で出産が行われていた時代においては出産に伴う儀礼として行われ、重要な役割を果たしていたのである。

実揚遺跡の胞衣皿 それでは、今回胞衣皿が出土した場所は、誰かの屋敷地だったのであろうか。近世の村絵図(写真2、赤○部分)等で確認すると、この地点が慈眼寺(町屋二丁目、明治6年(一八七六)薬師堂の地に移転)で居村(屋敷地)に囲まれていたことが分かる。この胞衣皿に隣接した場所の下方から墓跡も検出されていることから、胞衣皿は屋敷内ではなく寺院内の墓域に埋められたものと推定される。つまり、今回出土した胞衣皿は、出土地点やその形状から古墳時代に遡る遺物ではないと考えられるのである。



写真2 「町屋村絵図面」(部分)、国会図書館デジタルコレクション

町屋の胞衣納め 町屋地区の民俗調査では、Yさん(大正4年生まれ、昭和10年に出産)の場合として、次のような事例をあげている。

胎盤は、泥でできている(素焼きか?)十

センチメートル四方くらいの容れ物が薬局で売られており、それに入れておくと二、三日後には町屋地区内にあった通称「胞衣社」が取りに来た。出産があれば必ず取りにきた(荒川区民俗調査報告書(三)「町屋の民俗」、荒川区教育委員会、一九九三年)。

昭和初期のこの事例では、胞衣を容器に納めるものの中に埋めるという儀礼を伴っていない。つまり、胞衣会社に委ねられたのである。

実は、明治24年(一八九二)3月に「胞衣及産穢物八家産二近接セル場所ニ埋納スヘカラス、但胞衣産穢物取扱業者ハ東京府庁ノ許可ヲ得タル一定ノ埋納焼却場ノ外埋納又ハ焼却スルを得ス」(警察令第三号)という胞衣産穢物取扱業者以外による胞衣埋納を規制する命令が出されている。荒川区民俗調査団の聞き取り調査によれば、屋敷内に埋める事例は少なく、出産の際に胞衣会社に取扱を委ねたり、道灌山にできた胞衣神社に埋納したりする事例が確認できる。また、恩賜財団愛育会による全国産育儀礼調査では、東京は調査の対象とされていないが、農村部においては墓地に埋めるといふ事例が多く報告されている(『日本産育習俗資料集成』第一法規出版、一九七五年)。

今回出土した胞衣皿が慈眼寺旧境内と思われる場所から出土した背景には、明治政府が推進する衛生政策による警察令が影響していると考えられよう。近代の衛生観念の普及が古代以来連綿と続いてきた習俗に変容をもたらした証拠として注目したい。

【主な参考文献】拙稿「胞衣の行方―東京の胞衣神社と胞衣会社―」「近現代考古学の射程 今なぜ近現代を語るのか」(六一書房、二〇〇五年)

(野尻かおる)

うれしいお買い物⑨

尾久の熱海へ

いらつしやい

王電開通と温泉発見 大正時代の尾久の温泉地及び三業地は、尾久町の発展に大いに寄与したといわれている。大正2年(一九一三)、王子電氣軌道(通称王電)が飛鳥山下より三ノ輪間で開通し、停留場ができた尾久でも町を盛り上げようという機運が生まれた。折しも翌年、碩運寺(西尾久二丁目)の住職が境内で鉱泉を発見したことから「寺の湯(不老閣)」を開業、近隣でも採掘が盛んとなり、保生館・大河亭・小泉館・旭館・光泉閣・石橋亭・富貴館・霊泉館・熊野館



(東京三三三新聞) 尾久ラジウム温泉 阿多み

写真1 絵葉書「尾久ラジウム温泉 阿多み」



(東京三三三新聞) 尾久ラジウム温泉 阿多み(庭園の一部)

写真2 絵葉書「尾久ラジウム温泉 阿多み(庭園の一部)」

と続々ラジウム温泉を看板に旅館や料亭が誕生した(『新興の尾久町』下谷新聞北豊島支社編、一九二三年)。

風光明媚な近隣リゾート 小台停留場そばの割烹熱海(西尾久三丁目)も、その一つである。その証拠として、古い絵葉書をみると「旅館おんせん熱海」の看板を掲げている(写真1)。「尾久ラジウム温泉 阿多み」と印刷されており、「熱海」が創業当初につくった記念絵葉書と考えられる。現在の割烹熱海の三代目店主、根岸昌彦氏によれば、「熱海」は大正6年に開業した。温泉といっても鉱泉はぬるいため、館内の湯殿で沸かし直して提供していたという。

門を入ると中は家屋だけでなく、回遊式庭園が存在した(写真2)。この庭園は、池の周囲を平屋と回廊で繋いでいる。庭石に腰掛ける着物の女性達や子供、半纏の人物や釣糸を垂れる男性等、ポーズをとった14名が写る。根岸氏によれば、200坪の敷地の中央

に300坪の池があり、ここに屋台舟を浮かべて常連客が芸者衆と舟遊びをしたという。最盛期の「熱海」の座敷は芸者衆200名が出たそう。着物姿の女性達は、芸者衆だろう。また、当時最大の得意客は、「熱海」と同年創業で、尾久工場があった旭電化工業(現株ADEK A)で、都都逸「小台の渡しに旭がのぼり熱海繁盛で日が暮れる」が芸者

衆に唄われるほど賑わっていたという。残念ながらこの庭園と家屋は昭和20年(一九四五)3月の東京大空襲で全て焼失したそう。

伊豆の熱海と尾久の「熱海」 そもそも店名をなぜ「熱海」としたのだろうか? それは創業者の根岸要之助が「尾久の町を、伊豆熱海温泉のような歓楽街にしたい」と志したことに拠る。

『熱海市史』下巻(熱海市、一九六八年)によれば、伊豆の熱海温泉は、江戸時代は著名な湯治場として、明治時代以降は別荘のあるリゾート地として賑わった。湯治客の増加に伴い、桜や梅園などの庭園や遊園地の開園、演芸場・貸馬・釣船など娯楽遊興サービスも増えた。関東大震災後の大正14年には国鉄熱海線が開通、東京の奥座敷と化し、多機能が混在した歓楽的温泉観光地として名を上げた。前述のように、尾久の「熱海」もまた温泉や庭園を備え、伊豆の熱海温泉のような温泉地としての施設を旨とし、整備していったといえる。

ところで、昭和14年の尾久の「熱海」の新聞広告には「本格温泉風」「情趣と設備」「二時間かかる相州熱海」「尾久の熱海は三十分」と書かれ、遠隔地に行かずとも近場で娯楽があると東京市内からの利用客を想定していることがわかる(『読売新聞』昭和14年1月8日号)。

再び写真1を見てみると中央には、辰巳門と呼ばれた灯籠付の正門が見え、手前に砂利が敷かれた王電のレールが見える。王電に乘車し、多くの利用客が尾久の「熱海」にやって来たのだらう。

※執筆にあたって協力頂きました割烹熱海の根岸昌彦氏に心よりお礼申し上げます

(高柳吟音)



写真 1 渡辺光氏



写真 2 渡辺家の木賊



写真 3 乾燥させた木賊(上)と棕の葉(下)



写真 4 棕の葉による研磨

令和六年度、指物職人の渡辺光さん(写真1)が荒川区指定無形文化財保持者に認定されました。その調査で工房を訪れた際、庭に木賊を植えていると伺いました(写真2)。

木賊の効果 木賊(写真3)は木工・金工で砥ぐ(研磨する)作業に適した草(「砥草」とも表記)として知られ、指物の業界でも伝統的な研磨材として用いられています。

指物といえば、木工作品の製作において、鉄釘を使わないほぞ組による組み立てを行います。最後に木目を活かした拭漆等を塗師に託すあたり、表面に細かい傷一つない仕上げに適した滑らかな状態にしなくてはならないからです。

近年、研磨材としては、目の粗いものから細かいものまで分かれているサンドペーパーが、利便性の高さもあり、木工の業界でも仕上げの工程で導入されています。しかし、指物ではそれだけで済ませず、あえて木賊を用いるのは、伝統的な研磨材の良さがあるからです。

木賊による研磨 渡辺さんによると、乾燥させ



た木賊の茎部分を適度な大きさに切り分けて広げ、水で湿らせて磨きます。木賊を用いると、磨いた木材の表面に艶が出ます。サンドペーパーだけの研磨がパサついた感触に思えるほどの明らかな違いが出るそうです。ゆえに一点ものが多い指物では重要な用具の一つです。

まず目の粗いサンドペーパーから研磨をはじめ、その後仕上げに使います。

棕の葉による研磨 さらに伝統的な研磨材として棕の葉(写真3)があります。桑のような堅木(硬質な木材)を研磨するために用いられます(写真4)。木賊で研磨した後に、棕の葉で研磨することで、表面がより滑らかになるそうで、磨いた後の手ざわりにも違いが出ます。但し、指物職人の間でも使

いこなすのは難しく、やみくもに棕の葉で磨けばよい訳ではなく、熟練の技があつてのこと。

渡辺さんは、父・稟三さん(元荒川区指定無形文化財保持者)から桑師としての技術と知識を受け継いで、堅い桑材の扱いに精通している区内の指物職人のひとりなのです。

木賊・棕の葉の調達 ところで、区内の他の指物職人さんたちにも聞いてみると、木賊は渡辺家だけでなく、井上喜夫さん(荒川区指定無形文化財保持者)・健志さん(荒川区登録無形文化財保持者)親子、根本一徳さん(荒川区登録無形文化財保持者)の工房でも、自宅で栽培した木賊をストックして使っているとのこと。背景としては、サンドペーパーの普及によって、木賊・棕の葉の需要が大きく減ってあまり流通しなくなったことがあるようです。とはいえ必要な用具・材料・工具は勿論、良い用具あつての良い作品ということなのでしょう。このように、伝統工芸の仕事は工房内の作業だけに留まらず、敷地全体を機能的に使っているところにも注目です。

〈澤田善明〉



写真1 延命子育地蔵尊の縁日

の作者で知られる加太こうじは「昭和九年の頃の尾久には熊の前通りと荒川遊園のあたりに、日をちがえて露店の夜店が開店した。」

尾久の縁日「縁日」という言葉を聞くと、屋台を照らすほのかな明かり、綿あめ、焼きそば、金魚すくいなどが立ち並ぶ夜の風景、小遣いを握りしめて駆けつけた子供の頃の記憶が蘇るという人が多いことだろう。尾久では、そんな縁日が今でも定期的に開かれている。二の日は荒川遊園近くの延命子育地藏尊、五の日は東尾久満光寺の二葉地藏、九の日は熊野前商店街の伏見稲荷の三つで、毎月計9回の縁日が開かれている。自転車でも簡単に移動できる約26・9kmの尾久地区内で9回は驚異的な数といえる（表1）。このような行事が伝承されている地域は、区内では尾久地区のみである。

加太こうじの記憶　そもそも尾久の縁日は、いつごろから開かれていたのだろうか。関東大震災後に尾久で子供時代を過ごした「黄金バット」

伝統芸能等記録映像

「尾久の縁日」

（葉地蔵の縁日）



縁日名 開催日 場所	概要 ①開催日②由緒等③講
延命子育地藏尊の縁日 (西尾久六丁目)	①2・12・22②北方の船方村境にあったお堂を戦後に移転。縁日戦前からあり③講あり
熊野前商店街伏見稻荷の縁日 (東尾久五丁目)	①5・15・30②戦前に創祀、開始は未詳③伏見稻荷③熊野前商店街振興組合
満光寺二葉地藏堂の縁日 (東尾久三丁目)	①9・19・29②地藏堂大正12年11月再建。縁日昭和27年開始③二葉地藏講(解散)

表1 尾久の縁日概要(令和6年度調査)

各縁日の露店の種類(同じ露店商が 尾久の縁日の他、八幡神社、町屋 稲荷に出店)	ベビーカステラ、焼きそば、クレープ、小籠包・ じゃがバター、チキンステーキ、たこ焼き、餡 餅等
---	---

表2 尾久の縁日の露店(令和6年度調査)

25日の墨書があり、檀家手島助次郎が震災犠牲者の慰霊のために地藏堂の建設を願し、檀信徒が寄付に応じて震災後二ヶ月にして建立されたことがわかる。写真には、小さいながら真新しい地藏堂、法要の実施を示す角塔婆、参列した檀信徒とおびただしい数の子供らの姿、「震災大破堂宇修復費」と書かれた奉

少年少女から二十代の若者は夜店をぶらついて、夏は氷屋、秋から汁粉屋をにぎわした」と述べている（『サボテンの花』、晩聲社、一九八三年）。ここから延命子育地藏尊と伏見稲荷の縁日は戦前から行われ、子供だけでなく、青年も集まる行事であったことが窺える。

関東大震災と二葉地藏堂 他の二つに比して満光寺の二葉地藏の縁日は新しい（表1）。ただ、二葉地藏そのものは、少なくとも関東大震災以前に安置されていた可能性がある。今回、満光寺で二葉地藏堂の古写真を確認した（写真2）。裏面に大正12年（一九二三）11月25日の墨書があ

名板の一部等が写っている。尾久の被害は軽微なものであったと言われ、10月には下尾久に配給所が設けられて救護活動が行われていた。満光寺本堂も被災しているが救助と慰霊を先行して行っているところに、震災直後の人びとの心情を読み取ることができる。このような経緯のもと人びとに信仰されてきた二葉地蔵の縁日は、戦後の昭和27年（一九五二）、二葉地蔵講の発足とともに始まったようだ。満光寺の高田昭仁前住職によると、戦後のベビーブームにより尾久に限らず町中に子供があふれていたそうで、縁日もたいそう賑わいだっただという。

尾久の三つの縁日は、講や寺院、露店商のみなさんによって維持されてきた。信仰を背景に始まったはずの縁日だが次第に信仰は影をひそめ今日では地域公認の子供たちの遊興の場として機能し続けているかのようである。昔も今も尾久の風物詩であり、尾久の景観の一部を形成してきたことは間違いない。

（野尻かおる）

区では地域で行われている貴重な伝統行事を記録するために「伝統芸能等記録映像」の制作を行っています。今後の縁日の調査、撮影を行うのに当り情報をお寄せ下さい。

写真2 二葉地蔵堂落慶供養の記念写真（満光寺蔵）



写真2 二葉地蔵堂落慶供養の記念写真(満光寺蔵)

令和 6 年度 荒川ふるさと 文化館の活動 と 文化財保護活動

令和 6 年

(3月15日)～6月12日 あらかわ伝統工芸ギャラリー展示「はばたけ！若手職人展」技をつなぐ」
 4月18日 第1回文化財保護推進委員会
 4月20日 あらかわ座「解説・体験」(漆塗・角光男氏)
 4月27日～6月16日 館蔵資料展「速報！あらかわの文化財展」
 4月27日 速報展ギャラリートーク
 5月2日～7月19日 庁舎エントランスコーナー(木版画摺・川嶋秀勝氏・小川信人氏)
 5月12日 史跡探訪「南千住の新しい文化財を観に行こう」
 5月18日 上映会&ミニトーク「伝統に生きる」(桐たんす 村井正孝氏/桐たんす仕上げ 村井泰雄氏)
 5月25日 速報展ギャラリートーク
 6月5、12、19、26日(全4回) 古文書講座「古文書に親しむ」初級編
 6月7日 文化財保護審議会(諮問)
 6月14日～10月9日 あらかわ伝統工芸ギャラリー展示「あらかわの伝統工芸―木竹工・諸工芸―」
 6月20日 第2回文化財保護推進委員会
 6月27日～9月5日 博物館実習生受け入れ(9日間・4名)
 6月29日 月イチギャラリートーク
 6月30日 あらかわ座「解説・体験」(指物・井上喜夫氏・井上健志氏)
 7月3日 南千住図書館合同イベント「七夕おはなし会」

7月12日～14日 あらかわの伝統技術展(会場：荒川総合スポーツセンター)
 7月19日～10月18日 庁舎エントランスコーナー(七宝・畠山弘氏/三味線・加藤金治氏・倉橋勝氏/漆塗・角光男氏)
 7月27日・8月31日 夏休み子ども博物館「親子で楽しむ展示解説」
 8月1日 夏休み子ども博物館「リトル芸芸員」
 8月3日～9月1日 館蔵資料展「和竿職人・四代目竿忠とあらかわ展」
 8月3日・4日 八幡神社祭礼調査
 8月7日 夏休み子ども博物館「俳句を作ろう」(市橋洋子氏・武井澄子氏)
 8月18日 夏休み子ども博物館「勾玉作りにチャレンジ」
 8月21日 文化財保護審議会(部会調査)
 8月22日 第3回文化財保護推進委員会
 8月24日 夏休み子ども博物館「あらかわ職人道場 ヒノキの箸を作ろう」(指物 渡辺光氏)
 8月24日・25日 諏方神社祭礼調査
 8月25日 夏休み子ども博物館「あらかわ職人道場 裏打ちを体験してみよう」(表具 田尻和久氏)
 9月10日 文化財保護審議会(部会調査)
 9月11日、10月9日、11月6日、12月4日(全4回) 古文書講座「古文書に親しむ」(中級編)
 9月28日 月イチギャラリートーク
 10月3日～11月22日 あらかわ学校職人教室
 10月11日～3月12日 あらかわ伝統工芸ギャラリー「あらかわの伝統工芸―金工・諸工芸―」
 10月11日 「荒川ふるさと文化館だより 52号」刊行
 10月17日 第4回文化財保護推進委員会
 10月26日～12月1日 企画展「鑄造のまち日暮里―銅像の近代―」

10月26日 企画展関連イベント 伝統に生きる上映会「鑄造 菓子満」&展示解説
 11月2日・3日・4日 荒川区伝統工芸技術保存会主催「あらかわ座市」
 11月9日 企画展関連イベント 記念講演会「日暮里から旅立った駒馬像」(講師・渋谷区立松濤美術館学芸員野城今日子氏)
 11月10日 企画展関連イベント あらかわ座&伝統に生きる上映会「鑄造 堀川次男」(講師・鑄金 松本隆一氏・松本育祥氏)
 11月17日 あらかわ座「実演・体験」(提灯文字 村田修一氏)
 11月30日 企画展ギャラリートーク
 12月1日 企画展関連イベント「あらかわ銅像散歩&工房見学」
 12月10日～2月12日 庁舎エントランスコーナー(つまみかんざし・戸村絹代氏/金箔押し・竹澤光雄氏/鍛金・長澤利久氏)
 12月14日 月イチギャラリートーク
 12月27日 文化財保護審議会(答申案)
令和 7 年
 1月8日～31日 町屋四丁目実揚遺跡O地点本調査
 1月16日 第5回文化財保護推進委員会
 1月25日 月イチギャラリートーク
 1月29日 文化財保護審議会(答申)
 2月1日～9日 荒川区文化遺産地域活性化推進事業運営委員会主催講演会「三河島のたからもの―山車人形の魅力を伝える―(会場：ゆいの森あらかわ)」
 2月12日～5月上旬(予定) 庁舎エントランスコーナー(つまみかんざし・石田一郎氏/のれん染・片山昭氏・片山琢満氏)
 2月13日 令和 6 年度荒川区指定文化財告示【指定】無形文化財・工芸技術

指物(渡辺光氏)

2月19・22日・3月5日 伝統芸能等記録映像「尾久の縁日」撮影

2月22日 月イチギャラリートーク

2月25日～3月31日 町屋四丁目実揚遺跡P地点本調査

3月9日 第6回文化財保護推進委員会

3月14日～6月11日 あらかわ伝統工芸ギャラリー展示「はばたけ！若手職人展」技をつなぐ」

3月22日 奥の細道矢立初めの地 子ども俳句相撲大会千秋楽(会場：荒川総合スポーツセンター)※千秋楽結果パネル展示(1階エントランス)

3月25日 区指定文化財認定書交付式

3月28日 伝統工芸技術記録映像「伝統に生きる 衣裳着人形 竹中恵恵」完成

3月29日 月イチギャラリートーク

3月31日 「荒川ふるさと文化館だより 53号」刊行

3月31日 令和 6 年度区史跡説明板設置【修繕】(ハンノキ山/稲荷神社(原稲荷))

表彰関係

・伝統的工芸品産業功労者等経済産業大臣表彰 指物 井上健志氏(荒川区登録無形文化財保持者)
 ・東京都優秀技能者(東京マイスタ)知事賞表彰 桐たんす仕上げ 村井泰雄氏(荒川区指定無形文化財保持者)

計 報

荒川区登録無形文化財保持者(工芸技術/象牙挽物・細工)梶田秀樹氏は去る令和 6 年 9 月 30 日に逝去されました(享年 73 歳)。
 謹んでご冥福をお祈りいたします。